

# 若越郷土研究

25ノ2

## 郷土史研究十年の軌跡

—昭和四五年（一九七〇）—

五四年（一九七九）—

舟 沢 茂 樹

はじめに

福井県の一九七〇年代（昭和四五—五四）は、原子力発電の運転開始・北陸高速自動車道の建設等高度経済成長の波にのって明けたが、後半より基幹産業繊維の構造的不況が恒常化し、その他一般の景況も低迷を続けるままに一九八〇年代に引継がれるに至った。このような一般の世情とはかかわりなく、郷土史研究についてはこの十年多くの問題をほらみながら高度成長を続けたといえる。市町

舟 沢 郷土史研究十年の軌跡

村史編纂・埋蔵文化財の発掘調査・歴史資料館の建設・研究団体の動向どれをとってみても末広がりに多くの収穫をあげている。そこでその軌跡を回顧し、成果の概要を明らかにしたい。まず、第一章では上記四つのテーマ別にその推移を概観し、第二章において年次別に具体的な成果の要約を試みた。限られた紙数のためごく一部の事例を取り上げたにすぎず、殊に諸誌に発表された論文等はすべて割愛せざるを得なかった。不備ではあるが、郷土史研究の動向を瞥見する資料として利用して頂ければ幸である。

### 一、郷土史研究の推移とその成果

#### (1) 市町村史の編纂

郷土史研究の主流をなしてきたものに市町村史の編纂がある。福井県の場合その胎動がはじまったのは、昭和二五年頃からであるが以後三〇年を経て現在までに六二の市町村史が刊行された。当初は昭和二八年公布の町村合併促進法が引金となり廃村となった村々で編纂熱が高ま

ったが、昭和四〇年代に入ると新市町村の修史事業がはじまった。昭和四五年以降において特にその傾向が顕著であった。現在県下に七市・二八町村があるが、市史は全市で、町村史は二五町村で編纂が実施された。そのうち二市・一九町村は既に事業を完結し、五市（敦賀・小浜・鯖江・勝山・大野）六町村（今立・永平寺・河野・越廼・宮崎・美山）が継続中である。昭和三〇年代に廃村の地区で旧村史編纂の気運が高まったことを前述したが、昭和五〇年代に入り旧村史編纂熱が再燃していることを付記しておくたい。（例「心のふる里東安居」昭53・「ふるさと味真野」昭54）

近年の編纂の特徴として史料編の重視があり、「敦賀市史史料編」「小浜市史史料編」等すぐれた成果を得ているが、その過程で史料目録（池田町等）や紀要（「鯖江史壇」等）が刊行されるようになったことにも注目したい。また、今立町のように昭和五三年から史料調査をはじめ一年半で約六万コマの史料を撮影し、

その保存を計っているところもある。

市町村史は数年後にその多くが編纂事業を完了するが、その成果の上に県史編纂が進められることになった。置県百年記念事業として昭和五三年四月に着手したが、小葉田淳京都大学名誉教授を監修者に迎え、今後一〇年で通史編五冊・資料編一六冊が刊行される。

### (2) 埋蔵文化財の発掘調査

昭和四〇年代に入り北陸高速自動車道の建設問題が具体化した。昭和四二年に遺跡分布調査が実施され、糞置・原目等の重要遺跡をめぐり紛糾したが、昭和四四年度より路線上の遺跡の緊急発掘調査が開始された。発掘調査は昭和五二年までに二五遺跡について行われた。

同じく昭和四〇年代に俄に脚光をあびたものに一乗谷朝倉氏遺跡がある。戦国時代の越前国守護朝倉氏五代の城館とその城下町の遺構であるが、昭和四六年に国の特別史跡に指定され、翌四七年には県朝倉氏遺跡調査研究所が設立されて本格的な学術調査がはじまった。膨大な発

掘遺品を収蔵する施設として県朝倉氏遺跡資料館が昭和四四年秋に起工された。

一方、若狭地方の緊急発掘調査では鳥浜貝塚が全国的な反響をよんだ。昭和五〇年には日本最古の木製品等が大量に出土して「縄文のタイムカプセル」として注目された。

北陸高速自動車道関係遺跡・一乗谷朝倉氏遺跡・鳥浜貝塚はいづれも県の実施した調査であるが、市町村の発掘調査にもすぐれた成果を得ている。幾つかの事例を挙げれば、越前では天神山古墳群（福井市）・松明山古墳（今立町）等、若狭では若狭国分寺跡（小浜市）等がある。天神山古墳からは昭和五三年に日本海側で初の純金製耳飾りが出土し、松明山古墳からは昭和五四年に珍しい模様の銅鏡が発見され話題となった。また、若狭国分寺は発掘の結果その遺構が明らかとなり、昭和五〇年に国の史跡に指定された。

### (3) 歴史資料館の建設

昭和五〇年前後から県下各地で資料館建設の気運が盛り上り、ことに昭和五三、

五四兩年には敦賀・鯖江・小浜・三市、丸岡・朝日・美山・名田庄村の四町村が相次いで開設された。現在建設中のものに県朝倉氏遺跡資料館・三国町立郷土資料館があり、近く着工のものには県若狭歴史民俗資料館・県埋蔵文化財センターがある。また、県立博物館についても昭和五

四年に「基本的事項に関する意見書」が答申され具体的な開設準備に入った。

現在活動中の施設のうちから近年注目すべき業績をあげている数館を紹介したい。

福井市立郷土歴史博物館は「春岳公記念文庫」「越葵文庫」といった全国的にも評価されている福井藩関係史料を収蔵している。前者は昭和四五年に子孫が寄贈したもので、幕末維新期に活躍した松平春岳の関係史料・遺品から構成されている。後者は昭和五二年旧福井藩主松平家から寄託されたもので、同家伝来の文書・重器を内容としている。以上二文庫

の整理がすすめられているが、県立図書館蔵「松平文庫」とあわせることで福井

藩研究は一層深められることになろう。

鯖江市資料館の中核的資料は鯖江藩問部家文書である。昭和五年の開館と軌を一にして市長の発案で問部文書刊行委員会が発足、五ヶ年計画で全五巻の史料集刊行が進められている。

小浜市郷土歴史資料館は、旧小浜藩主酒井家が所蔵史料を寄附したことが機縁となつて昭和五四年に開設された。同館では文化庁の補助事業として「酒井家文庫目録」の編纂に着手した。

朝日町郷土資料館では昭和五四年に幸若展を開催したが、郷土芸能保存会も結成されてその復活がはかられている。

#### (4) 研究団体の動向

福井県下では長年にわたり福井県郷土誌懇談会（創立昭和二七年）が唯一の研究団体として県全域の研究者をまとめてきた。しかし昭和四〇年代半ばより各地で地域毎の問題とかわりながら小グループの研究活動が表面化してきた。越前文化の会（昭和四四年会誌創刊）・若狭考古研究会（昭和四四年結成）・福井県

地域史研究会（昭和四五年会誌創刊）などがその主な事例である。昭和五〇年前後は研究活動が更に一層の飛躍をみた時期で、より規模の大きい団体が相次いで誕生した。まず昭和四七年に若狭史学会が結成され、次いで昭和五〇年には福井の文化財を考える会と福井民俗の会が、翌五一年には県無形民俗文化財保護協議会が設立された。

県教委では昭和四六年より全市町村にそれぞれ文化指標を設けて文化の里づくり運動をはじめたが、それが定着して研究団体として結実したところも多い。今立町『和紙の里』の「越前和紙を愛する今立の会」（昭和四七）、池田町『能楽の里』の「池田の文化を守る会」（昭和五〇）、松岡町『王墓の里』の「松岡古墳群を守る会」（昭和五二）、上中町『文書の里』の「文書の里づくり推進協議会」（昭和五二）などがそれである。

## 二、年次別成果の概要

### (1) 昭和四五年（一九七〇）

〔市町村史〕 小浜市史編纂委ではこの年より紀要と史料調査目録の刊行をはじめ自治体史編纂に新生面を開いた。また、ダム建設で湖底に水没する大野郡西谷村は惜別の記念に「西谷村誌」を出版した。〔文化財〕 北陸高速自動車道建設に伴う記録保存のための緊急発掘調査が昭和四四年より実施されたが、その第一集として「北陸自動車道路関係埋蔵文化財調査概要報告書一」（県教委）が刊行された。県下には保存対策を講ずべき民家が多いが、この年、民家緊急調査報告「福井県の民家」（県教委）が出版された。〔出版〕 県内の伝説を新しい視点で集大成した杉原丈夫編「越前若狭の伝説」（松見文庫）が刊行された。松見文庫は坂井松見氏が私財を投じて設立した出版団体で、すぐれた郷土資料を相次いで世に問うた功績は見逃せない。なお、前記杉原氏はこの年県文化賞も受賞している。

### (2) 昭和四六年（一九七一）

〔市町村史〕 「織田町史」「郷土誌大飯」「名田庄村誌」が刊行。「名田庄村誌」

は、歴史・自然・民俗・文化財・史料編等が適度な構成を保ち、町村史の一つの典型となっている。

〔朝倉氏研究〕 七月、朝倉氏遺跡が国の特別史跡として広域指定（二七八ヘクタール）された。県岡島美術記念館では秋季特別展として「朝倉文化展」を開催した。〔出版〕 昭和四〇年代なかばより繊維産業の構造的不況が顕在化したが、その見直しをはかるため福井県繊維協会では「福井県繊維産業史」の大冊を出版した。

郷土史研究の基礎史料である近世の地誌を集成した「越前若狭地誌叢書」（杉原丈夫編・松見文庫）の初巻が上梓された。全三巻の完結は昭和五二年。

〔古文書調査〕 福井県立図書館では、近年その散逸の著しい古文書の実態調査を四ヶ年計画で実施した。その成果は「福井県古文書所在調査報告書」として昭和五四年に刊行された。

### (3) 昭和四七年（一九七二）

〔歴史館〕 福井市立郷土歴史博物館収蔵資料の中心である春岳公記念文庫（約四

百点）の解説目録の刊行がこの年よりはじまった。「文書編」を初巻とし、「什器編」「追贈編」とつづき昭和五二年の「総索引編」をもって全四冊を完結した。

同館は毎年すぐれた企画展を開催しているが、この年「若狭医学史展」が催され医学の先進地であったことが大系的に示された。

〔研究団体〕 若狭地方の歴史・地理・民俗等を総合的に研究する団体として若狭史学会が発足した。会員数約四百名で、福井県郷土誌懇談会に次ぐ大組織として会誌「若狭」を創刊する外出版事業にも意欲的などころをみせた。昭和四八年より三ヶ年にわたって会誌に連載された「若狭国古文書所在目録一〜九」は、基礎固めの研究調査として評価したい。

### (4) 昭和四八年（一九七三）

〔市町村史〕 「鯖江市史史料編一」「芦原町史」「坂井町史」刊行。「声原町史」は県内外の研究者がその編纂に参加したことで高い水準を示しているが、二年間の史料調査の成果が史料編として出版さ

れなかったことが惜しまれる。

〔文化の里づくり〕 昭和四六年度よりはじめられた最初の具体的成果として今立町の「和紙の里」がある。この年、町立和紙の里会館が着工、古紙・和紙関係文献の収集をはじめた。一方同館の関係団体である越前和紙を愛する会ではこの年に会報「和紙の里」を創刊し、「越前和紙のはなし」（齊藤岩雄著）を出版した。福井市立郷土歴史博物館でも今立町・県和紙工業協同組合の協賛を得てこの年の春季特別展で「越前和紙の歴史展」を開催した。

### (5) 昭和四九年（一九七四）

〔市町村史〕 「勝山市史一」刊行。「勝山市史」は、通史三巻・資料編三巻からなり、初巻の通史一は「風土と歴史」の副題をもち、約六割（約六〇〇頁）が「むらの歴史と生活」「まちの歴史と生活」にあてられている。ことに村の記述では八四の大字毎に項を改めて歴史・地名・生活史等が明らかにされ、通史の編集に新しい様式を導入している。

〔出版〕 福井県郷土誌懇談会より「越前幕末維新公用日記」（谷口初意校訂）と「福井県郷土新書第一集」が刊行された。

「越前幕末維新公用日記」は福井藩家老本多修理の日記（元治元―明治二）で、従来の薩長を中心とした幕末維新史料とは異なる立場の新史料として注目されている。福井県郷土新書は、昭和四〇年に完結した「福井県郷土叢書」に次ぐ企画で、郷土史の主要テーマを啓蒙的な視点から書き下したものである。第一集としては三上一夫「幕末の越前藩」が出版された。

〔研究団体〕 四月に福井民俗の会、翌五月に福井の文化財を考える会が設立された。前者は二十年近く活動を中止していた県民俗学会の再組織したもので会員約百名、次第に姿を消しつつある年中行事・生活伝承の記録化を企図している。後者は、昭和四〇年代の異常な発掘ブームの反省として生まれたもので会員約二百名、埋蔵文化財について学びながらその保存を訴えていくことが設立の趣旨である。

〔出版〕 学制百年に当る昭和四七年頃より学校史ブームが起り昭和五〇年前後に、約四〇の小学校が創立百周年記念史を発刊した。これらは単に学校史にとどまらず校区の地域史としての側面をもっている。学校史がほぼ出尽くした昭和五〇年より「県教育百年史」（県教育研究所）が出版を開始し、昭和五四年に全四巻を完結した。

〔越前一向一揆研究〕 県教委は三ヶ年計画の一向一揆関係文書調査をこの年に終了し、約七百点の史料を採集した。福井県郷土誌懇談会でも福井県郷土新書二集として重松明久「蓮如と越前一向一揆」を出版、福井市立郷土歴史博物館も秋季特別展として「越前真宗史料展」を開催した。

〔文化財〕 文化庁では町並みの景観保存のため全国で十ヶ所の調査地区を指定したが、今庄町板取もその選に入った。福井大学工学部建築史教室はこの年今庄町

の委嘱により「福井県南条郡今庄町板取地区伝統的建造物群に関する調査報告書」

を公刊した。

〔出版〕 「越前国宗門御改帳」（全六冊）の著者佐久高士氏は、本書を統計的に分析した労作「近世農村の数的研究」を出版した。

〔7〕昭和五十一年（一九七六）

〔市町村史〕 「新修福井市史二」「武生市史八」「朝日町史」「南条町誌」刊行。福井・武生両市はこの年で編纂を完結した。

武生市は十四年かけて資料編七冊・概説編一冊を出版、本格的な市町村史の先駆的業績として評価された。「新修福井市史」は戦後の行政史として特色をもっているが、更に史料編を中核とした修史事業に着手されることを望みたい。

〔民話〕 昭和五〇年前後にかけて各地の婦人会・青年団、あるいはボランティア活動として民話を語り継ぐ運動が展開された。「ふるさとの昔話」（小浜市連合婦人会、昭49）や「たけふむかしむかし」（武生市婦人ボランティア民話グループ、昭52）はその一例だが、この年、民話・伝説の代表的研究者杉原丈夫氏が実証的研

究視角から民話の本質を解明した「若越民話の世界」(福井県郷土新書三)を出版した。

〔出版〕 近年プロジェクトチームを編成して共同研究を行う研究グループが多いが、この年に出版された「松ヶ鼻用水沿革史」と「集注越前萬歳」はその適例といえる。前者は斎藤嘉造氏を中心に七名

が松ヶ鼻土地改良区の依頼で五ヶ年がかりで日野川をめぐる農民の苦闘の歴史を解明したものである。後者は六戸部信淳氏をはじめ五名が六年を要して国指定無形文化財「越前萬歳」を系統的に調査研究し、自費出版したものであった。

(8)昭和五二年(一九七七)

〔市町村史〕 「敦賀市史 史料編一」 「池田町史」 「越前町史上下」 「和泉村史」 が刊行され、実り多い年であった。

「敦賀市史」は史料編五、通史編二からなり、精選された史料編は高い水準を示している。「和泉村史」は事情あって刊行までに十三年を要したが、格調高い内容で評価されている。

〔文化財〕 昭和四四年からはじまった北陸高速自動車道の建設のため越前地方では空前の発掘ブームが起ったが、その緊急調査もこの年で終了した。昭和五〇年代に入りその成果が「北陸自動車道関係遺跡調査報告書」(県教委)として相次いで刊行され、現在までに第七・第一一を除き一二集まで出版されている。

この年開館した福井県立美術館は記念出版として「福井の美術」を刊行した。若狭古代の仏像彫刻や若越の中近世絵画史を内容とし、本県美術史研究の今後の方向を示している。

〔出版〕 福井藩研究に関する編纂書として「中根雪江先生」(中根雪江先生百年祭事業会)と「福井藩史事典」(舟沢茂樹編)が出版された。前者は、幕末維新时期において松平春岳を補佐して活躍した福井藩老臣中根の詳細な伝記と資料集で、はじめて世に問われる詳細な伝記として注目したい。後者は、明治初年に郡奉行の職にあった鈴木準道の著書「福井藩役々勤務雑誌」を改編したもので、藩政機構

の実態を知る基本的史料である。

(9)昭和五三年(一九七八)

〔市町村史〕 「大野市史 社寺文書編」 「松岡町史上」 「清水町史上」 が刊行された。「大野市史」は、史料編五冊・通史編三冊・写真図録一冊の予定。「松岡町史」は既に昭和四七年に下巻を刊行、全二巻を完結した。

〔研究団体〕 正倉院開田図と現在の景観がほぼ一致する全国稀有の遺構として注目された糞置荘遺跡は、高速自動車道・圃場整備事業・宅地造成等の乱開発の影響を受け破壊の危機にさらされてきた。福井の文化財を考える会では、昭和五二

年に国の史跡指定による保存を訴えて二千名以上の署名を集めたが、この年「越前の古代荘園―糞置荘遺跡の危機」(岸俊男等著)を出版した。

〔朝倉氏研究〕 昭和四七年に県朝倉氏遺跡調査研究所が開設されて発掘調査・環境整備事業が軌道にのった。同研究所では翌四八年度から五二年度にかけて実施

した五ヶ年の調査整備結果をこの年に「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡環境整備事業報告書」として刊行した。また、福井県郷土誌懇談会でも福井県郷土新書四集として「朝倉氏と戦国村一乗谷」（松原信之）を出版した。

〔出版〕この年は例年になく災害史に大きな成果があった。「福井空襲史」（福井空襲史刊行会）、「福井空襲前後の医療小史」（県医師会）、「福井烈震誌」（福井市）がそれである。「福井空襲史」は、九五パーセントを焼失した悲惨な体験を五百人以上の証言を得て編集したものである。

#### (10) 昭和五四年（一九七九）

〔文化の国際交流〕この年、「日下部・グリフィス国際交流基金」設立準備会が福井大学内に設置された。福井文化の国際化の突破口としてその将来に期待したい。福井県郷土新書五集として「グリフィスと福井」（山下英一）が出版されたことも時宜を得ていた。

〔文化財〕縄文前期の著名な遺跡として

注目された鳥浜貝塚の緊急発掘調査は、昭和四九年より同五三年まで五ヶ年計画で実施された。遺跡は大幅な河川改修のために既に破壊されたが、記録保存の成果として、この年「鳥浜貝塚―縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査」（県教委）が出版された。

最近の文化財調査の特色の一つとして中近世の城館跡調査が挙げられる。若狭地方では昭和五二、五三両年度において中世城館跡の調査が実施され、「若狭の中世城館」（小浜市教委）が刊行された。

また、小浜城跡の発掘調査も多田川改修工事との関連ではじめられた。一方越前地方でも県庁舎建設との関係で福井城石垣の構造調査等が実施され、重要文化財丸岡城も国宝昇格を検討するため文化庁の学術調査が行われた。

〔出版〕三上一夫氏の著作「公武合体論の研究―越前藩幕末維新史分析」の出版が大きな話題となった。「若越郷土研究」などの諸誌に発表された論文を集大成したもので、公武合体運動で終始重要な役

割を果した福井藩の動向を精緻に解明している。

#### おわりに

これまで「市町村史の編纂」「埋蔵文化財の発掘調査」「歴史資料館の建設」「研究団体の動向」の四つを一九七〇年代（昭和四五―五四年）の郷土史研究の主軸としてとらえ、その推移と成果の概観を試みた。これらの成果はどのように一九八〇年代に引き継がれ発展を遂げているのであろうか、それについて展望と課題を要約しておきたい。

ところで、埋蔵文化財の発掘調査については北陸新幹線の着工が具体化すれば異常なブームの再発も予想されるが、一九七〇年代の成果については歴史資料館の問題とともに考えてみるべきものである。また、市町村史編纂については、一九八〇年代はむしろ県史が主流となるのをそれをも含め自治体史の編纂として考えてみたい。そこで「自治体史編纂」「歴史資料館」「研究団体」に項を分けて意見を述べることにする。

## (1) 自治体史編纂

〔市町村史〕 市町村史編纂は前述のように既に最盛期を過ぎたが、そこで編纂終了後の問題として史料の保存と活用について考えたい。

近年の傾向として精疎の差はあれ編集に先行して史料調査が行われているが、その収集史料が編纂終了後散逸する例が多い。某町のように県外の大学に流出したところもある。史料の保存と活用の体制を編纂の時点で確立しておくことが必要であろう。文書館は無理としても当該市町村の歴史資料館・図書館へ移管することも含め関係者に熟考していただきたい。

〔県史編纂〕 計画では初巻を昭和五六年に、最終の第二二巻を昭和六二年に刊行する予定であるが、まさに一九八〇年代の全県規模の文化的大事業といえる。従来福井県では研究者の層も薄く、研究者団体の交流も殆どみられなかった。県史編纂を契機に研究基盤が整備され、県内外の多くの研究者の参加ですぐれた共同

研究の成果が実ることに期待したい。

## (2) 歴史資料館

〔市町村施設〕 前述の通り各地の歴史資料館は、当該地域の研究者・団体と協同で企画展や資料を刊行して郷土史研究の発展に貢献している。しかし、どの館にも共通していることは専門職員と館藏品購入費の極端な不足である。中には専任職員すらいないため常時開館に支障をきたしている施設すらあるのが現状である。当局の十分な配慮を要望したい。

〔県施設〕 長年の懸案であった埋蔵文化財の収蔵施設として県朝倉氏遺跡資料館・県若狭歴史民俗資料館・県埋蔵文化財センターが一両年中に開設される運びとなったことを喜びたい。また、昭和五六年着工を目標に県立博物館が設置されるが、その意見書によると県内の風土・歴史が生み出した文化遺産を大系的に展示し、将来に対する思索を深める場として役立てたいという。県下全域にわたる歴史の総合的研究施設として運営されることに期待したい。

## (3) 研究団体

福井県における郷土史研究の問題点に研究者の絶対数不足があげられる。地元大学に文学部がないことも一因だが、組織の大きい研究団体の運営の行き詰りにも原因があらう。会誌の質的充実・研究会の開催等研究意欲を刺激する方策で会員増加を計る必要がある。また、大小の研究グループは、相互の交流を深め共通の問題について情報交換をはかってほしいものである。幸い県史編纂も軌道にのり、各地の歴史資料館の活動も活発化してきている。これらが共通の研究基盤として活用されることを望みたい。

紙数が尽きたため図書館について述べることができなかつた。県立図書館をはじめ主要各館はこれまでも郷土資料を収集し、目録・書誌を刊行することで郷土史研究の向上に貢献してきた。各地域の郷土資料センターとして今後一層の充実発展を期待したい。ことに昭和五六年春移転改築の県立図書館には、郷土資料室

が設置され、また、同館には県史編纂室も併設される。相乗的効果を発揮し、郷土史研究の推進力となることであろう。